中高年者における前十字靱帯再建術後の成績

福岡大学医学部整形外科

黒 木 理 秀・緒 方 公 介
原 道 也・松 浦 一 平
藤 原 明・星 子 一 郎
山 田 昌登嗣・金 宮 毅
佐 伯 和 彦・城 島 宏

Post Operative Assessment of Anterior Cruciate Ligament Reconstruction in Older Patients

by

Yoshihide Kuroki, Kosuke Ogata, Michiya Hara, Ippei Matsuura,
Akira Fujiwara, Ichiro Hoshiko, Masatoshi Yamada,
Tsuyoshi Kanamiya, Kazuhiko Saeki and Hiroshi Joujima

Department of Orthopaedic Surgery, School of Medicine,
Fukuoka University, Fukuoka, Japan

Anterior cruciate ligament (ACL) reconstruction in older patients will occur more often as patients live longer and play sports more.

We investigated 13 patients with the Lysholm score, aged over 40-years-old after ACL reconstruction. The patients were seven male and six female, with an average age of 47-years.

The mean Lysholm score was 92.8 points. Preoperatively twelve of thirteen patient played sports and postoperatively nine of twelve patients (75%) continued playing.

As ACL reconstruction for young patients is valuable, the operation for older patients is also of value.

Key words : anterior cruciate ligament reconstruction (前十字靱帯再建術), older patients (中高年患者), Lysholm score (Lysholm スコア)

はじめに

前十字靱帯再建は若年者に対して施行することが多いが、最近はレクリエーションレベルでのスポーツや仕事を続けるために中高年者でも施行されることが多くなった。今回我々は当科で行った40才以上のACL再建術の術後成績につき評価を行ったので報告する。

対象と方法

対象は1992年1月より96年10月の間に当科及び

関連の施設で施行した40歳以上のACL再建症例14例のうち追跡調査し得た13例(男性7例, 女性6例)である。手術時平均年齢47.1歳(40歳~65歳), 40歳台10例, 50歳台2例, 60歳台1例であった。

平均follow up期間は3.0年(8ヶ月~5年5ヶ月), 評価はLysholm scoreを用いて行った。

結 果

術後のtotal及び項目別のlysholm scoreの結果の平均を示す(表1)。総合点は71点~100点の間であ

り平均 92.8 点であった。また術前 13 例中 12 例までがスポーツ愛好者であり術後の復帰レベルは不可の症例は存在しなかった（表 2）。

症 例

代表症例を呈示する。

65 歳，男性。45 年前ラグビーにて受傷。外科的加療は受けていなかったが，50 歳時よりゴルフを始めた。ハンディキャップ 4 であり，県の代表選手である。プレー中の givingway，痛みが強くなり手術を希望した。初診時左膝の腫脹，Lachmann test，Pivot shift 陽性で，ストレス撮影側面像の健側比では前方

引出し 2 mm であった。術前の MRI では ACL は不明瞭で lateral meniscus は損傷が疑われた（図 1）。術中所見では ACL は既に癒着化しており，ACL の再建術を施行した（図 2）。また術前 McMurray test が陽性であり，lateral meniscus には中節から後節にかけての変性と縦断裂を認め，trimming を加えている。術後 9 ヶ月の抜釘時の鏡視所見では ACL は volume，tension とも良好で lateral compartment に O. A. change の進行は認められなかった（図 3）。当症例の術前及び手術後 2 年の時点での Lysholm score での変化は，total score で 43 点から 90 点に大きく上昇している（表 3）。この患者はゴルフ愛好

図 1 「術前 MRI」

- a. ACL に一致する低信号域が認められない。
- b. lateral meniscus は mixed intensity であり，損傷を疑わせた。

図 2 「術中鏡視所見」

- a. 癒着化 ACL
- b. 再建後 ACL

図3 「術後9ヶ月の鏡視所見」

- a. ACLはvolume, tension共に良好であった。
b. lateral compartmentにO. A.の進行は認めなかった。

者であり, limping, support, lockingと言った項目は術前よりfull scoreでありADL上は大きな問題となっていなかったが, ゴルフのラウンド時に長距離を歩くのに痛み, 腫脹等で困難を感じ, またinstabilityもプレーの障害となっていたため手術を希望した。術後これらの点が改善し67歳の現在もプレーを続けている。

考 察

近年のスポーツ人口の増加に伴って40歳以上の中高年者のACL損傷も増加しつつある。従来あまり手術適応がないとされていたこれらの年齢層の患者でもレクリエーションレベルでのスポーツ復帰を希望するものも多く, instabilityがその妨げとなっていることが多い¹⁾。手術適応については, 保存的加療を行った後, それでも患者の満足度が低く, 更にそれ以上のことを望むばい手術を検討する。今回の症例でもほとんどが日常生活には問題の無い人々であったが, 術前よりスポーツをしなかった1名を除いた12名のうち9名が術後も継続してスポーツを行っており, こうした意欲の高い人々は術後のリハビリテーションに対しても意欲的であり, 従ってスポーツ復帰度も, 術後の満足度も高く, どの年齢層であっても手術適応になり得ると思われた²⁾。

術後のリハビリテーションに関しての問題点として若年者と比較した場合筋力の低下は否め無いが, 当科では術後早期のリハビリを行うことによりこの問題を

克服している。また中高年者における別の問題として, 若年者と比較すると半月損傷や軟骨損傷により痛みを呈する症例が多いと思われるが, 今回の術後評価で最低点であった症例は術後一旦かなりの改善を見ていたが, 術後3年4ヶ月経過した調査の時点でinstabilityの項目ではfull scoreであったにも関わらず, 平地歩行時や階段での痛みがあり, 変形性関節症の進行のためと思われた。そのため今回の症例では群を抜いて低得点であった。我々は鏡視を行った際, 進行した変形性関節症であり, また患者の主訴がinstabilityでなく痛みである場合, それらの症例には慎重に対応すべきであり, 再建術の適応とはなりにくいと考えている。

ま と め

1. 当科における40歳以上の中高年者ACLの術後成績は若年者と比較しても見劣りするものではなく, 意欲のある患者では術後の満足度も高い。

2. 今後は高齢化により中高年者であってもレクリエーションレベルのスポーツをする機会は増加すると思われる今後ACL再建の適応は拡大すると思われる。

参 考 文 献

- 1) 一戸貞文ら: 40歳以上のACL損傷に対する再建術の適応。日整会誌, 70(2)(3): S565, 1996.
- 2) Alan Barber F. et al.: Is an cruciate ligament reconstruction outcome age dependent? Arthroscopy, 12(6): 720-725, 1996.